

アナキスト、無頼漢ラプソディ

大沢・山口論文に欠けているもの

(1)

偉大で誠実なルナンは「キリストはアナルシストだ」と言った。作家高見順はアナキス無頼漢論をブッタそうだ。先輩水沼さんはそれに抗議された。同志横倉君は無頼漢でどこが悪い、と痰阿をきった。

ぼくはこれらのどれにも賛成だ、というのは、人も知る通り、キリストは定職なく、家なく、その友人は泥棒や、淫売婦や貧乏人ばかりで、おまけに、彼は自分と他人を同視せずばやまない天賦の稟性をもっていた。

ところで、無頼漢は、自分か自分の女ぐらいしか愛しえないガリガリのエゴイストだ。もし当時の金持ち共や権力者ピラトのように、彼の稟性を見れば、キリストは無頼漢とわかるまい。しかも、この二つの愛についての典型は、プロチヌスにおいては勿論のこと、アリストテレスによってさえも、霊魂がエロスに動かされて、真の美の世界へ上昇する梯子

だから、結局エロスとアガペエは同じだ。これを疑う人はヒンズー教徒のタソトリズム（性的興奮をかりて神秘的法悦に達する同教徒）の基礎練習を調べられたい。

ぼくは、ここでアナキストと無頼漢は同じだなどと、チャチな論理的遊戯をやっているのではない。ぼくは両者は違うと考えている。しかも違っているがゆえに同じだ、という普通ではうけ入れがたい事実を信じているのだ。例えば、メクラとチンパは違っているが、共に人間である、という事実は否定できない。

この事実をもっとはっきりさせるためにニイチェの「権力の意志」―「力の意志」の問題を援用してみよう。マルチン・ブウバアによれば、この力の意志を、ニイチェはかの有名な「超人」に固有な「所有物」だと間違って考えた。ところが、実際、この「力の意志」は、ある目的、ある仕事、ある使命を実現する能力と結びついた「力の感覚」で、その限りにおいて、善でも悪でもない。つまりわれわれ人類が、道徳的な鎖にしばりつけられている類魔的な群棲動物であることを、否定して、「いためられた本能を明るみに出し」、それに無限の可能性を発揮させようとする点では、アナキストも無頼漢も同じだが、前者は社会協同体設定の目的に、その「力の意志」を結びつけているのに反し、後者はそれを「所有」として、自己に固有な力そのものとして悪用している点で、違っている。

くだいようだが、ブウバアはニイチェに強い影響を与えたブルクハルトを引用して、「無限に多くの者の能力が集約されている人の使命感を帯びた力の意志と、個人のエゴイズムと

の間には、神秘的な一致がある」ともいつている。無頼漢とアナキストとは同じだが違っていると言うぼくのネタはここにもころがっている。

(2)

こんどは、こうした実存的な面ではなく、社会的な面へ入ってみよう。そのためには、マルクスが純粋科学に祭りあげたが、依然として非経験的で独裁的な社会科学の中でも、その雄なるもの―経済学を登場させねばならない。

現在、人々は経済学ほど重要なものはないと考えている。日本などでは経済専門家と自称する人間に政治すら任せている。大学の講壇、テレビの解説、議会の演壇及び新聞の特別寄稿欄でも、経済学者は大もてだ。丁度十八世紀に哲人、合理主義者などが最高視されたのと同様に最も重要視されている。だがこれは、人を小馬鹿にしたみせかけに過ぎない。それは十八世紀の哲人、合理主義者及び歴史に明るい賢人共が、政治の王座についてどんなヘマを踏んだが、よく人の知るところだ。諸君は経済学者が、絶対にありうべからざる事だと断言したことが、現実ではどうなったかを知っている。例えば、金本位制は絶対に崩壊しないと経済専門家は断言した。その口の端のかわかぬうちに、それはこなごなに崩れてしまった。戦

前、ドイツ第一流の経済学者シャハト博士は、その該博で透徹した経済理論で、相互貿易協定など絶対によりえないと論証した。ところが現在、日本とソ連、中共などが、どんな貿易の仕方をしていくかよく知られるところだ。

一体全体、経済学が科学とされたとき、科学に固有な因果法則を必要とするところからホモ・エコノミカス（経済人）という概念をデッチ上げた。その概念内容は、づるくて小利巧で、おまけに人間を幸福にする道を知っていると自称するずうずうしい奴であった。純粋科学なら多少の例外は無視してさしつかえないが、その概念のあいまいさから非経験的で独断的な経済学では、例外こそが最も重要な要因だ。だからヘンリー・フォードが、独占は物価を引き上げ、生産を少くする、という経済原則があるにもかかわらず、それを知らないために独占に成功した時、古典経済学の全体系は崩壊してしまった。

多くの国々では、残在している中小企業との賃金の格差の矛盾が表面化した。その他多くの不幸が起った。それらをカバーするために、資本主義は帝国主義化した。われわれは、この傾向を、ある論者のように資本主義の積極的な再生とはみない。むしろ、火がまさに消えようとする時に燃えさかると同じに、資本主義の最後のあがきと断定する。何故なら、経済学が科学として一人歩き出来るなら、国家などという化け物の介入を必要とするわけがないからである。

資本主義は、デカルトのテーゼによってその発展の基礎を与えられてから、二百年間にわ

たって繁栄を持った。しかし、今や、ランダウアーやブウバーの社会協同体のテーゼが入れかわり、こんど、三、四百年間、われわれの社会協同体の社会機構の基本テーゼとなるだろう期待が、心ある人々の胸を打ちはじめた。そのための条件は出そろっている。

即ち、社会主義及び資本主義に共通する基盤である経済人という概念が、ガラガラと崩れつつある。社会主義及び資本主義を通じては、人類の自由も平等も所詮不可能だということ、ますます明白になってきた。

山口君が「自由連合」十月号の末尾でいっているように、「日常的なあらゆる分野での共同体化への不断の試行を通じて形成される一社会共同体が、将来社会的姿であることは間違いない。大沢論文の場合でも、仮説(一)の上属^原プロレタリアが最も革命的だという点を除けば、山口論文の線一即ち、ブルードン、クロボトキン、殊にランダウアーのすじに一致する。

ところでランダウアーは、「社会革命は平和な構造を持ち、次の新しい精神のための新しい精神の組織化以外のなものでもない」が、にも拘らず「社会革命は多くの政治革命なしには存在することも持続することも出来ない」と断定している。

だから両論文は、先ずこの断定が正しいかどうか吟味し、続いて大沢論文の「上属^原プロレタリアが最も革命的だ」という言葉の意味が、政治革命か、それとも社会革命か、どちらであるかを論及すべきであった。両論文とも原形のままでは平和な社会革命へそのまま移行することが可能なような印象を与える。

そこでもし両論文がランダウアーの主張を認めるとすれば、そうとうはげしい政治的変革を承認せざるを得ないだろう。従って大沢論文の場合、「最も革命的な」上層プロレタリアは、国民議会で「国家や所有の問題はさしずめ置くとしても、生産の管理の問題では、最も強力な発言権を持たねばなるまい。これを可能にするためには、アナキズムの伝統からいっても、又、歴史的にも、議会外の膨大な大衆―無頼漢、ルンペン、貧民、その他もろもろの不平等分子等々の蜂起と暴動とそして支持を当然必要とするだろう。

ぼくは両論文の遠景の中にこれらの探求がないとはいわれない。欠けているのは、欲望の力と認識の力の媒介物―即ち判断の基礎をなす美の要素が欠けていると思う。それは単に心の第三の次元や能力では断じてなく、その中心、つまり自然が自由の影響を受け入れ、必然が自律性の影響を受け入れるようにする媒介者だからだ。

或いは山口君はいうかも知れない。「日々の試行を通じての共同体」確立に向う仕事、現代の「経済人」というような万人が深く信じうる新しい概念の形成に自分は役立てば良いともしそうなら、それにも僕は異疑はない。なぜなら、社会共同体という概念は、その山頂を雲の上にもちらっと見せるばかりだから………。

(3)

しかしぼくは、この概念形成の努力だけとって見ても、それは先ず、客体の中に求めるよりも、主体的でなければならぬと思う。ブウバーが何と云おうとも、それはバトスの決意の撰択を必須なものとする。

つまり行動不在では、ムードすらも作れない。中世の教会の扉に見られるレリーフが、どれもこれも教主、僧正、国王などの墮地獄を描いているのは、逆心ある石工のロマンチックな空想では断じてなく、当時の現実であった事をわれわれは忘れまい。―現在、少くとも、アナキスト達は書いたり議論したりはしている。そして共産党にくらべて、そのポタン穴の処女性を誇っているが、行動は不在だ。アナキストに代って誰が動いているか、全学連が少しは動いているように見える。又、それと同等異質の無頼漢どもも動いているように見える。

今、ぼくは全学連と無頼漢とを同等異質だといったが、先ず、同等の問題から片づけたい。ぼくの考えでは、彼らは行動しているように見えるが、実はそうではない。ただ演戯をやっているだけだと思われる。日本の伝統の町やっこのな見せかけの意識が充満していて、彼らには何時でも観客が必要なのだ。彼らは時に、ブルジョワジイの喉笛にかみつくかも知れな

い。又、警官の向う脛をへし折るかも知れないが、それらは、すでに鏡の中での念入りなりハ―サルのレストランに過ぎないようだ。

しかし、バイロン風のダンテイズムには、これとは異質的な叛逆の血が混入していたことは、歴史的に有名だ。例えば、現在、盛んであるアメリカのビート族について、ぼくが前に書いたように、シスコ郊外ヴェニス地下茶房でジャズの詩を書き春画の展示会をひらき、夜は夜でアメリカの中をボロ車で暴走しながら非行を重ねている彼らの行為には、見せかけやロマンチズムは棄にしたくともない。即ち、かつての演戯はみせかけの世界から行為の世界へ移行している。だから、かつてラバシヨルが、パリの裁判所で死刑を宣告された時、

「政府さへも勝手に貨幣を作っているのに、おれがおれの力でこれを造って使うのが、なぜ悪い」と豪語した悲痛な叫びまでは、今一歩ということだ。

ラバシヨルはともかくも、彼らソ連的社会主义や、資本主義の見せかけの豊富の中には、断じて真の自由や平等はなく、機会の均等すら絶無であることを、骨のずいから感じとっている。しかも、その数は潜在的には幾何学級数的に増大している。嘘だと思ふ人は、彼らに石を投げつけようと信じている者を、若い労働者や若者達の間で探してみたまえ。その数が如何に少ないかに諸君は驚くだろう。おまけに彼らの行動は、最近の英国における郵便列車襲撃事件のように、集団化する傾向がある。

社会主義者共は、原爆反対運動の主導権をかすめとるための猿芝居にうつつを抜かしてい

る、アナキスト達は議論しながら、そのボタン穴の処女性を誇っている。その間に一人狼たちは、カッパライ、誘拐、強盗、そして殺人にさえ、その体を張ってぶつかっている。四、五年前、大宰の墓前で自殺したスポーツマン上りの作家があった。彼は、自分を最も汚い、最もだらしのない、最も乱暴な、そして最もくだらない人間の最低部にまで落下さすことにおいて、イワン・カラマゾフのように人間の無罪を明らかにせんとした。わがエマ・ゴオルドマンはビ IPPACK の大争議の時、A・ベルクマンに頼まれたピストルを買う金に困って、自ら淫売婦になり下った。彼女は口紅をつけて街頭に立った、見栄も誇りもすてた。ヨハン・モストに会った当時のアナキズムさへ棄てた。そして真のアナキストになった。

日本にもこの深刻な伝統があって、歴史をぐっと一本つらぬいていることを、篤学な著述家Kが「無用者の棄護」という著書の中で述べている。一例だけあげよう。徳川中期だっただと思う、やがて高野山の法統を継ぐはずだった博学で高徳な聖僧があった。一夜、廁に行くといつて姿をくらましてしまい、大きな騒ぎにはなったが、探しても無駄であった。のちに彼は美濃、尾張などの農家を転々として、田畑の仕事を手伝いながら、名を秘してその生涯を送ったという。ぼくは、これをほめていいのではない。むしろぼくはこの消極性をきらっている。にも拘わらず、たまらない自己否定が徹在していると思う。

アナキズムは、それ以外の一切を否定する哲学だが、果して、それだけで良いのであろうか………。

「自由連合」は八二号（九四号）（一九六二年一月から六三年一月まで）の約一年余にわたって、「古典的革命観からの解放」をめぐる討論を展開した。その契機となった大沢論文は、現代資本主義体制を分析して、次の五つの仮説を提起した。

(一) 革命の主力となる階層は、窮乏し貧困な下層プロレタリアートではなく、産業において重要な位置を占め、現代資本主義の矛盾にさらされている上層プロレタリアート（一部は新中間階級にくみこまれつつある）でないか。

(二) 革命の主な戦略目標は、所有の形式をめぐる問題ではなく、労働の組織をめぐる問題、いいかえれば、労働者がどういう形で、生産を管理し運営していくかの問題になるのではないか。

(三) それと関連し、国家権力の奪取は、革命にとって、決して必然の過程ではなく、むしろ、国家を頂点とする官僚制（中央集権制）に対置される、人民組織（自由連合制）の増殖による、国家権力の機能喪失の過程が考えられるのではないか。

(四) 政治過程を軸とした革命は、ますます可能性がなくなり、代って、社会過程というか、経済産業、教育、地域社会、家族など、人間集団の構造的更新を軸とした、漸進的変革

が主体となるのではないか。

(五) それに関連して、革命は、政治革命であるよりも、社会革命、文化革命の性格をもち、教育の役割は、きわめて高いものとなるのではないか。

又、大沢論文に付加するように、山口論文は、「アナキズム革命の新しい社会の形態や組織は、将来、支配階級の権力が打倒された後、始めて形成されるものでなく、その遠い将来の革命に到る迄の革命を通じて、取られる手段の中にこそ、形成されるべきものである。

それ故、政治レベルでの闘いのみでなく、社会のあらゆる分野での構造的更新の闘いとなる。そのとき、権力との衝突の決定的瞬間を避けえないが、然し、権力の攻撃下にあっても、主体的な構造更新は可能である」と大沢論文を受け、「国家の中に、本来の国家の本質と矛盾したもの、対立したものが存在している。一言にいえば、それは、国家の中の社会的機能であり、革命とはかかる社会的機能の中にくいこみ、国家権力の社会的基盤をほりくずしていく闘いである。

それは、ランダウアーのいうように、「国家の外側」から行われるものではなく、「国家の内部矛盾」からつくられていくものである。しかしその内部矛盾を自然現象視して、その爆発を期待するのではなく、また内部矛盾を権力掌握に利用するのでもなく、社会革命は、その内部矛盾（国家の二面性）のそれぞれを媒介項として、日常的なあらゆる分野での社会

化（共同体化）への、不断の試行を通じて形成されるものでなければならぬ」と主張した。

本稿は、「大沢、山口論文に欠けているもの」という傍題をつけて、ガリ版刷りで多分一九六三年のアナ連西日本協議会開催の前後小川氏が配布したものである。